# 幸せの入手法

clown

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
幸せの入手法

【Ｎコード】
Ｎ７０４８Ｙ

【作者名】
ｃｌｏｗｎ

【あらすじ】
平凡が嫌いな学生、永井健太（ナガイ ケンタ）のところに、ある朝、手紙が届き、「あなたは選ばれました！」と告げられる。その後、電話がかかってきて、どこか見知らぬ世界に来て、幸せとは何かを考え、戦い、６日間を生き抜く。

# Prologue　招待

去年の春に一人暮らしをはじめた学生の「永井（ナガイ）　健太（ケンタ）」は、今の生活に満足をしていなかった。別に、彼の財産が少なくて、食欲などの生理的欲求を満たされていないというわけではない。ただ、彼の生活があまりに平凡すぎたのだ。

彼は、平凡が嫌いだった。何事も他人とは少し違ったことをしたがった。小学校のころは、みんながランドセルなのに対して、普通のスポーツバッグを持っていったり、水泳の授業のときに、みんなが普通の海水パンツをはいてきているのに対して、水泳選手が使うような競泳用の水着を持っていったり、とにかく他人とは少し違うことをしてきた。

そんな彼も、中学生になるころには、できるだけ友達と同じことをするようになった。友達とできるだけ同じことをしないとみんなから、さげすむような目つきで見られるからだ。彼は、人から「あいつは自分より劣っている」と思われるのも大嫌いだった。

彼は、中学、高校とできるだけ友達にあわせるふりをして、友達から見えないようなところで、他人とは違うことをしていた。

彼はいつも運動でも、勉学でもトップクラスだった。彼が、他人から、「自分より劣っている」と思われないように努力をしていたのも理由のひとつだが、彼自身、才能があったというのも理由のひとつなのかもしれない。

そんな彼のところに、ある朝、一通の封筒が届いた。送り主は書いておらず、ただ大きな文字で「永井健太様」と書かれているごく普通の封筒だった。中をあけてみると、便箋が一枚入っていた。その便箋には、とてもきれいな楷書（カイショ）で、「あなたは選ばれました！後日連絡を差し上げます。」とだけ書いてあった。

（なんだ、ただの悪徳商法か）と彼はその手紙を見て思った。そして、クシャッと丸めてゴミ箱に捨てた。

数日後、彼のところに電話が来た。電話をかけてきた相手は非通知だった。彼はとりあえず、電話に出てみる。
「もしもし」
「あっ、もしもし、永井健太様ですか？」
それは、幼い少女のようなかわいらしい声だった。
「はい、そうですが」
「こちら、あなたにいつも幸せを、フェリシダージ事務所と申します。」
ずいぶん事務的なしゃべり方だった。
「えっと、フェリシダージ事務所さん？聞き覚えがないんですけど、何の用ですか？」
「はい。前日お手紙を差し上げたと思いますが、あなたは当事務所から選ばれました。」
永井健太は手紙のことを思い出す。そして、悪徳商法かと思い、電話を切ろうとするが、ここで切ったら他人と同じだ。と思い、とりあえず話を聞いてみることにした。
「えっと、よくわかんないんですけど、何に選ばれたんですか？」
「それは、お答えしかねます。」
彼は、きっと、この後、賞金がもらえるけど、手数料が必要だから、数万払えって話になるんだろうと思った。そして、何に選ばれたのかいえないのは、悪徳商法だってばれないようにだろうと思った。
「じゃあ、選ばれたから何だって言うんですか？」
「あなたは幸せを手にするチャンスを手にしました。」
「どういうことですか？」
「これから6日間、あなたには旅立ってもらいます。」
「どこに？」
「幸せへと導く都『シンフー』へ。」
彼はわけが分からなくなった。お金を請求するどころか、聞いた

こともないところに旅立つことになったらしい。どうせ、この後、そこへ行くために金が少しいるから払えってことになるんだろうけど、こんなのにだまされるやつなんているのか？と思った。

「えっと、それってお金とか、、、」

彼が発言しようとしたら、電話の向こうの声によってさえぎられた。

「それでは、まず、あなたの武器を決めてください。」

「え？」

「剣、銃はもちろん、手裏剣などの変わった武器も取り揃えています。ちなみに、選べる武器は最高で３つです。それ以上となると、レベルを上げてもらう必要があります。あちらについたらレベルを上げてそれでから注文してください。」

彼は何で、武器が必要なんだ？だいたいレベルって何だ？と思いつつ、とりあえず選んでみた。面白そうだと思ったから。

「じゃあ、攻撃魔法と守備魔法などが使えるようになる魔法の杖と、竜巻を起こすことができるようがな巨大な十字手裏剣、あとは、水鉄砲の威力を上げたもので」

他人がなかなか選らばなそうなものを選んでみた。

「かしこまりました」

あるのかよと彼はすこし驚いた。

「続いて、あなたの職業ですが、何になさいますか？」

「それって現実のと異なっていてもいいんですか？」

「もちろんです。」

「じゃあ、うーん、、、」

彼は少し悩む。

「自宅警備員で」

彼は他人が選らばなそうな職業を選ぶ。だって、普通、武器持ってるんだから、勇者とか、賢者とか選ばない？

「分かりました」

それでもいいんだと彼は驚く。

「ちなみに、職業の変更は後からでも可能です。」
「そうなんですか」
何かここまでくると、悪徳商法じゃないと思えてくる。
「それでは次のことを決めていただいたら、出発していただきます。衣服は、着いた先に用意されているので、着いたら着替えてください。」
「分かりました。」
出発ってどうやって？空港とかに行くのかな？パスポート持ってないよ？など彼の頭にたくさんの疑問が浮かぶ。そんな中、電話の向こうの声が最後の質問を問いかけてきた。
「あなたが、幸せと思うときはどんなときですか？」
彼はこの質問の意味があまり分からなかったが、とりあえず答えてみる。
「自分が他人より上に立ち、他人とは違うと思えたときかな。」
「かしこまりました。ではいってらっしゃい、幸せへと導かれるといいですね。」
そういって電話は切れた。
どうやら悪徳商法じゃなかったみたいだな～と彼は思って、いつもどおり、大学に行く準備をする。そして玄関の扉を開けた。すると、なぜか、なんかのゲームに出てくる宿屋の部屋見たいなところに出た。
そして、自分の横には、さっき電話で言ったとおりの武器が置いてあった。

## At First　チュートリアル

俺はいったいどこに来てしまったんだ？

とりあえず、ここが俺の家の中ではないことは確かみたいだ。

しかし、おかしい。俺は、いつものように、単位をとるために、大学のつまらない授業を聞き流しに行こうと思って、家を出たはずなのに、どうしてこんなところに来ているんだ？

足元を見ると武器見たいなおもちゃ？が落ちている。

どうやら俺が、電話でいった武器みたいだ。

ということは、この、杖を使えば、魔法が使えちゃうってこと？

ちょっと興奮気味に、某ドラゴンクエ〇〇でおなじみの火の玉が出てくる呪文を唱えてみる。

「メ〇！！」

しかし、何も起こらなかった。

静けさが、俺を辱める。つらい。

その後も、某最後のファンタジーの呪文や、とあるシスターさんが使ってた魔法なんかを唱えてみる。

しかし、何も起こらない。

もう知るかーって思って杖を投げると、その杖は床に落ちずに途中で消えた。

おお！魔法が使えた！って杖なくなったらだめじゃん！

って思った瞬間に、どこからともなく声が聞こえてきた。

「あなたの武器は、アイテムボックスに移動しました。」

アイテムボックス？何だそれ？

とりあえず、その声に向かって話しかけてみる。

「誰かいるんですか？ここどこなんですかね？俺、早く大学にいきたいんですけど。」

声からの返事はなかった。

しばらくして、また声が聞こえてきた。

「これからチュートリアルを行います。」

チュートリアル？なに言ってんだ？ゲームみたいなもんか？

とりあえず、チュートリアルという言葉とアイテムボックスという言葉で、ＲＰＧ的なものの中に入ってしまったのか？と妄想好きの俺は推理する。

「まずは、アイテムボックスの使い方です。アイテムボックスから物を出すときは、出したいものをイメージしてください。そうすれば自動的に出てきます。なお、地図、選択した武器、ステータス計量眼鏡が最初からオプションでアイテムボックスに入っています。アイテムをしまう際はそこら辺に軽く投げてください。」

なるほど、だからさっき空中で武器が消えたのか。つまりイメージすれば、、、

俺は杖をイメージする。

おお！予想通り、杖が出てきた。

「次に、武器の使い方です。まずは、あなたが今、アイテムボックスから出した杖です。その杖を使うと魔法が使えます。しかし、最初は、ボム、ドロップ、ホーリーという魔法しか使えません。レベルがあがるともっと多くの魔法が使えるようになります。試しに一回使ってみてください。」

おお！そんな名前の呪文だったのか！

全部、違う呪文だった。

とりあえず、試してみる。

「ドロップ！！」

すると杖からたくさんの水玉が飛び出し、とげのように飛んでいった。

おお！俺、今、魔法が使えた！

人にはできないことができるようになって、少しうれしかった。

「他の武器の使い方ですが、実際に戦闘をする際にアイテムボックスから出していただければ、そのつどご説明しますので、よろしくお願いします。続いて、この世界についての説明です。」

おお、俺の一番きになることだ。

「この世界は、あなたが生きている現実世界とは離れた空間、つまり、空想の世界です。ゲームの中と考えていただいて、かまいません。」

俺の、妄想が好きなことからでた推理が当たっていた。

「あなたには、この世界で、６日間生活してもらいます。ただ生活をするだけではなく、幸せを求めて旅をしてもらいます。旅の仲間は、このチュートリアルが終わったらいく広場で集めてください。」

なるほど、つまり、仲間と一緒に旅をして、６日間の間にゴールへ向かえってことだな。面白そうじゃん。

「そして、忠告ですが、もしも、旅の途中で体力が０になり息絶えてしまった場合、二度と現実世界には戻れません。」

その、忠告で少し不安になった。

現実世界にもどれないだって？

「しかし、きっとあなたは幸せな生活をおくることができます。」

冗談じゃない。俺は、現実世界に戻るんだ！

絶対、死なない、と決心した。

「これで、チュートリアルは終わりです。それではいってらっしゃい。」

その直後、目の前が真っ暗になった。

そして、気がつくと、人がたくさんいる広場に立っていた。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7048y/

幸せの入手法

2011年11月22日05時17分発行